対談　2018.1.18 於.東京大学会議室

坂田朋子(以下司会)

お二人とも2017年に済々黌校長、東京同窓会会長に就任されました。まず就任から今日までの感想などをお聞かせいただきたいと思います。竹下黌長は、人吉高校のご卒業とお聞きしているので、他校卒業生の目から見た濟々黌の第一印象などもお聞かせいただけたらと思います。

竹下黌長(以下黌長)

まず、歴代の会長を始め東京同窓会の皆様には本黌の教育活動に対する物心両面に亘るご支援を賜りありがとうございます。着任以来日々濟々黌という学校のスケールの大きさをまた責任の重さを感じています。私は赴任する前は濟々黌は「型破り」な生徒が多くて・・・と思っていたんですが意外とそうでもなくて素直で明るい生徒が多いなと感じているところです。最初に経験したのが恩賜記念大運動会でしたけれども、とても生徒の活力があってみんな一致団結している姿、リーダーとして頑張る生徒もいますけどもそれを支えるフォロワーですかそういう立場で頑張っている生徒がそれぞれいて盛り上げていこうとする生徒たちを逞しく感じました。またいろんな会で卒業生の方とお会いするのですけど非常に後輩を大事に思って頂いているのが伝わってきます。同窓生だけでなく、同心会(PTA)の皆様も本黌を愛しご支援して頂いて大変ありがたく思っているところです。

池田会長（以下会長）

私は昭和42年卒、林田前会長の後を受けて会長に就任しました。私の任ではないなとも思ったんですけど、私を成長させてくれた濟々黌に何らかの貢献ができればと思っての就任でした。同窓会は学年幹事の皆さんと郷原代表幹事、水野事務局長のリーダシップで、しっかりした運営を続けていただいております。石原副会長のこれまでの多大な尽力で東京同窓会は今日の活動基盤ができました。また、太田副会長は青年部のイベントや他校との交流など、いろいろな活動で同窓会の盛り上げに尽力されています。この伝統をどのように若い人に繋いでいくのか、毎年大変な努力が積み重ねられていると感じています。

司会

それぞれの組織の、感じておられる課題がございましたらお聞かせください。

黌長

夏の学校説明会には1600人を超える中学生が来ています。このように期待される役割を本黌が果たしていくには、「継承」と「改革」のバランスが肝要であると考えています。本黌に脈々と流れる「不易」の精神文化というか、濟々黌魂と言われますけれども、それをどう継承していくか重要と思っていますし、時代の変化に伴う新しい教育界の流れを感じ、技術やノウハウといった「流行」に乗る必要もあります。「続けるために変わる」勇気

を持つこと、歴代の黌長が守ってきたことを大事にしながら変革すべき事柄には果敢に挑戦したいと思っています。

会長

激動の時代ですね。環境の変化に対応できないと生き延びることはできないと言われています。東京同窓会は幹事会の人たちがきっちり進めておりますので、その中に青年部の活動とか新しい活動が出てきて、これを同窓会としてどのように支援していけるかが大きな課題だと思います。一方で、会員の高齢化が進んでいます。高齢会員の継続的参画を維持していくことも課題だと思います。また、東海、関西、九州、熊本、海外などの会員との交流も、幹事さん達にあまり負担にならない範囲でですが、期待するところです。

司会

国際化について。濟々黌が SGH(スーパーグローバルハイスクール)に指定されています。現状などお聞かせください。また、豊かな国際経験をお持ちの会長からは母黌の現役生徒や卒業生に対してのアドバイスをいただければと思います。

黌長

本黌 SGH は「国際的素養を備え世界をリードする済々多士教育プログラム」と研究開発構想を決め、その下に2つのプロジェクトがあります。1つは課題研究です。本黌の大きな柱は環境教育となっていますが、ローカルな視点からしっかりと問題点と解決策を探求しながら視点を世界に向けていく、もう1つは英語を使ってディスカッションとプレゼンが出来る力を養いたいということで即興型ディベートというのをやっています。ちょうど今、高大接続の観点からの入試改革が進みつつあり、ディスカッションとプレゼン2つが求められるようになり、SGH 指定を契機に入試に適切に対応しながらグローバル人材の育成という大きな使命を果たしていきたいと思っています。ただ SGH 遂行の予算が当初の半分以下に減らされてきているといった現状があり厳しい運営状態です。同窓会の方から 100 万円ご支援頂いて活用させて頂いています。生徒の能力は極めて高いと常々感じています。国際的な分野への関心も高く海外体験や外国の方々との交流を奨励し、そのことにより語学学習の必要性をより切実に感じてくれればよいと考えています。

会長

交流の基本は相手に対する思いやり。そして課題はやはり言葉の壁をどのように乗り越えるかが課題ですよね。入社後、会社の先輩から、英語に 1500～2000 時間接する必要があると言われました。毎日 15 分英語に接しても、1 年間で 90 時間です。言葉というのはものすごく時間がかかるんです。私は東大以外の仕事としてアメリカの会社の日本事務所に 2 年前からいまして、とにかくアメリカ人はプレゼンがうまいです。プレゼンの教育をやっているんですよね。そしてディスカッションなどは日本人はできないですよね。性格にもよるし、日本文化の影響もあるし、だいたい日本人同士何考えているかわかる。そういうなかで黌長先生がご苦労されているのがよくわかります。

司会

国際化同様、ダイバーシティも社会の重要課題であり、その第一は男女共同参画だと思います。黌長先生に現在の校内の状況を、会長にはこの課題についてのお考えをお伺いします。

黌長

H29 年 5 月現在、男子620人、女子612人でした。平成の初め位からほぼ半数同士の比率となっています。H29 年の3年生は男子が応援団長でしたが、その前までは女子の団長が続きまして歴代引き継いでいる破帽学ランを着てがんばっておりました。本黌は男女関係なく意欲のあるやる気のある者が頑張れる環境が保障できている学校なのかなと思っています。野球の応援を見ていたら本番になって OB 団長が現役団長や団員に横からコソッと助言してうまくいくようにしてくれていました。濟々黌は縦も横も繋がりがあって良い学校だなとつくづく思いました。

会長

同窓会の中でも青年部の女性がリーダーシップをとって頑張っています。女性の活躍がこれからますます重要になり活躍できる社会になってきていることは間違いありませんが、まだまだ不十分だと思います。若い人達が非常にやる気があるんですけどその周りの環境がなかなか難しい、そういうところがなんとかなればいいのかなと思います。昔、7色の労働力という言葉があってシルバーは年寄り、ピンクは女性、その他の色は忘れてしまったのですが、エスニックとかいろんな労働力を共通でやるのがいいと聞いたことがあります。外国人を受け入れていくのも女性を受け入れていくのと同じような難しさがあると思います。ダイバーシティということは、先進国となった日本が、グローバル化が進む世界で輝き続けるために必須です。海外で活躍する人材の育成、他に例を見ない社会や文化の創造、新しい価値の創造、持続可能社会の実現、などなど、若い人に挑戦していただきたいことはたくさんあります。

司会

部活などについて現状をお話しいただければと思います。

黌長

同窓会や部活動 OB の皆様からは多大な支援を賜っており心から感謝申し上げます。生徒は多様な分野で活躍しており、本黌の名前を全国に知らしめてくれています。部活動加入は体育系824人、文科系343人で計 94.7%の極めて高い加入率と言えます。実際、濟々黌の〇〇部に入りたいと本黌を志願する中学生も少なくないようです。野球部の活躍は皆さん関心が高いですね、私自身、県高野連会長を務めています。 5 年前ですか夏春と甲子園に連続出場した時の主戦投手だった大竹くん、彼が今年ソフトバンクに入団することになり、1 月 5 日に入団激励会がありましたので参加してきました。彼はいろいろ悩んだんだけど自分がみんなに対して何ができるか考えた、プロにはいってやることがもう一つみんなにやれることかなと思った・・・と言っていました。野球部だけではありません。多くの生徒が多様な分野で活躍しています。変わらぬご支援を賜れば有り難いです。

司会

次に黄線の制帽廃止と卒業式での帽子投げについてお伺いいたします。

黌長

制帽は廃止ではなく、現在は「購入は任意。希望者は〇〇帽子店へ問い合わせを」としています。「制帽を男子全員が着用していた時代」、「男子全員が購入するが着用については緩やかだった時代（S58 卒、H4 卒談）」、「購入が男子希望者のみで多くが購入していた時代(H12、H13,16、18 年卒談)」、「ほとんど購入しなくなった時代」があります。この変化は学校側から働きかけたわけではなく、すべて時代の流れや若者の気質、それと保護者の意向もあったかもしれませんが、それに対応していった結果だと認識しています。当然、制帽着用についてはそれなりの議論があったものと思われますが、抵抗があったかどうかについては記録がなくてわかりません。帽子投げはS50年代後期（S57年3月？）に生徒の発案で始まったらしい。いろんなご意見もあろうと思いますが、もう 30 年以上続いており今や伝統となりつつあるというか名物になっていて、卒業生は男女とも楽しみにしています。投げる帽子は学校が保管しているものを使い、女性も帽子を投げます。

会長

年1回の 42 年卒同窓会「七夕会」で黄線帽子をずっと持ってくる人がいます。お開きにはその帽子を被って黌歌を歌うんですけど、それを見ると昔を思い出します。また修学旅行の時に黄線を被って銀座を歩いたんですけどみんなに注目して頂いたんで、そういう意味では若い人たちも被ってもらえればいろんなところで1つの個性の発揮にはなると私自身は思っています。みんなで被る必要は全然ないと思いますが好きな人はちゃんと被っていけばいいんじゃないかなと思いますね。

司会

校風、伝統についてお聞かせください。

会長

校風や伝統について、守るべきものと変えていかなければならないものがあると思いますが、そこら辺の仕分けをしていくのが難しいといえば難しいですよね。

黌長

時代に合わない部分があっても同窓生のみなさんが大事にしたいと思われている部分もあるんですよね、それをどう時代の中で取り組んでいくかだと思うんですけど。しかし本当に精神で大事にしているものというのは変わらずやっぱりずっと大事にしていくべきものだなと。 ここぞというときに全員が一致団結し、濟々黌としてまとまってやっていくような雰囲気というのを大事にしたいなあと思っているところです。大掃除の時があるんですが、佐々・井芹銅像を誰から言われるんじゃないけれども磨く生徒がいるんですよね。先生は他のところを掃除しろとは言わないし、生徒は僕たちは自分でやりますからとやっている。すごいなと思う。そういう人が育つ学校になるように今後ともしっかりとした伝統を守って行くことが重要かなと思っています。

会長

私は 1～2 年時に生徒会に出ろと先輩に言われて出たんですけど、その中の演説会では先輩達にさんざん野次られたんですが、その野次があたたかい野次なんで、その後の私のいろんなところで臆せずできるようになったのはこの経験だと思っています。みんながみんなで育んでいくという校風ですね、そこが非常にいいんじゃないかな。それと個性的なメンバーが揃っているというところがすばらしい校風だと思っています。

司会

最後に、ポスト平成をにらみ、今後に向けての抱負やお考えをお聞かせください。

黌長

多くの同窓生の皆さんと接する中で、本黌の歴史、莫大な人的資産、絆の強さ等に圧倒されることも多くありました。そういう環境の中で有形・無形の恩恵を受けながら教育活動に取り組ませて頂いていることにまず感謝しなければなりません。その一方で、生徒の力をまだまだ伸ばせていない部分もあるのではないかという反省すべきところも感じています。本黌生は能力が高くまだまだ秘めた力も大きいと感じています。とにかく生徒に活躍の場を、そして考えさせる場を与えて行きたいし、その場、チャンスを与えるためのご支援を皆様に頂ければありがたいなと思っています。ポスト平成がどのような時代になろうとも、先ほど述べました「不易と流行」を大切にしながら、地に足をつけ個々の課題に対処して参ります。

会長

日本は多様化することによってグローバル化する世界で成長しなければなりません。高等教育も多様化が必要ではないでしょうか。どこをどういう風にみなさんがそれに対応し、しかも伝統を守りながらというところを是非今仰ったようにやっていただければと思います。

東京同窓会としては、濟々黌を卒業して大学に入られたり、就職されたりした方々に何らかの形でいろんな精神的な支援、協調といいますかそういうことが出来る同窓会になればいいんじゃないかなと思っています。